

特別企画

副業者の素顔

—三人の複数就業者へのインタビュー調査から

〈ケース1〉給食会社の契約社員—副業は洋菓子製造工場でのアルバイト

桜井宏さん(仮名、三五歳)は東京・



板橋区内の公立小学校で平日の週五日、給食会社の契約社員として働いている。仕事は朝七時から始まり、七〇〇人もの生徒の給食づくりに格闘する毎日だ。「給食づくりは体力勝負なんですよ。大きな鍋をかきまわす。

洗い物だつて半端じゃない。七〇〇人が皿を三枚つかえば、二〇〇〇枚以上を洗わなくちゃいけないですからね。」

体力的にはきつい仕事だが、朝が早い分、仕事は三時には終わる。残業がないのが救いだと桜井さんは話す。

◇ ◇ ◇

桜井さんの副業は、毎週土曜日の洋菓子製造工場でのアルバイトだ。勤務時間は朝の八時三〇分から夕方五時まで。ラインを流れてくるケーキの上に苺を載せたり、苺の検品などが作業内容だという。

副業している理由を尋ねると、「やっぱり収入面ですわね」ときっぱり。給食の仕事では月収が一五

万円前後にとどまる。しかも、固定月給制ではなく日給月給制なので、勤務日が少ない月は、その分だけ収入が減ってしまう。毎週、副業のアルバイトをすれば、三万円程度の副収入が安定的に入ってくる。

給食会社で働く前は、正社員のSE(システムエンジニア)として働いていた。しかし、六年ほど働き、四、五人の部下のまとめ役になると体調を崩し、退職を余儀なくされた。一年間、まったく働かないで暮らし、今の副業のアルバイトで体を慣らすことにしたのだという。また、以前から料理に興味があったことから、同時に給食会社でも働きはじめた。副業生活の始まりはそこからだ。

◇ ◇ ◇

給食会社では、昨年一〇月までは、パート社員の身分だったが、昨年夏に念願の調理師免許を取得。免許取得を機に、フルタイムの契約社員に転ずることができた。今年四月には正社員として採用してもらえる見通しだ。

正社員になれば、収入アップも期待できそうなものだが、「いまの会社では、正社員でも特に若い人はみんな副業していますね。給料がそんなによくないから。会社も暗黙の了解でそれを許している」と言う。正社員になっても、

副業生活はしばらく続きそうだ。

気がかりなのは、最近の景気悪化で副業のアルバイトも勤務日数が減ってきていること。仕事がある場合は前日に電話がかかってくるのだが、この取材に応じた月では「まだ一日しか仕事に入れていない」と話した。

〈ケース2〉正社員SE—副業はアルバイトプログラマー

広瀬俊夫さん(仮名、三二歳)は、本業では独立系のシステムインテグレータの会社で、正社員のSE(システムエンジニア)として働いている。クライアントである証券会社の子会社に常駐して、証券会社のシステムを設計したり、保守業務を担う。土、日曜日を除き、都内の自宅から横浜まで通勤している。

大学の理工学部では情報工学を専攻し、コンピュータサイエンスなどを学んだ。そんなコンピュータ関係に精通する広瀬さんが副業に選んだのは、やはりコンピュータ関連の仕事だった。プログラミングを専門とする会社のアルバイトプログラマーとして、毎週土曜日、朝一〇時から夕方六時まで働く。こちらの仕事でも横浜まで通勤している。

√ √ √

副業を始めたのは昨年八月から。本業の会社に入社したばかりの頃は、週末はコンピュータ技能の自己研鑽のための時間に充てていた。しかし、七年がたち、仕事にも慣れてくると時間的に余裕が出てきた。そこで、「収入も増えるし、スキルアップにもなる。一石二鳥」ということで副業を始めたのだという。

いまの副業は、インターネットで検索して見つけた。時給は二〇〇〇円弱。副業月収は平均して一〇万円に届かない程度だ。なぜ、収入を増やしたいと思ったかを尋ねると、「特にお金が必要というわけではないんですが・・・」。将来への不安ですね」との返事。自分の雇用が具体的に脅かされているわけではないが、昨年のリーマンショックで収入面での防衛意識がさらに強まったという。

また、SEやプログラマーは長時間勤務などが原因で体調を壊す人も少なくない。自分もいつ、そうした立場になつて働けなくなるかもわからない。体力のある内にできるだけ給料を稼いでおきたい、そんな思いも強いと話す。

√ √ √

本業の会社では、「たしか副業は届出が必要になつている」が、特に届出はしていない。他の社員も広瀬さんが副業していることは知らない。「就業規則を読み返してみようと思つていたんですが、できないまま、ここまで来てしまいました」と恥ずかしそうに言った。

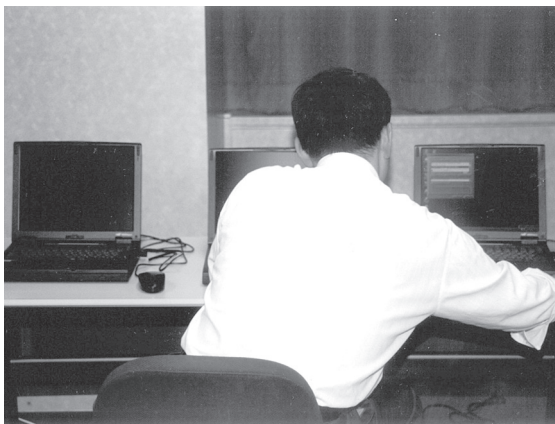
今後ともいまの副業を続けるかについては、「在宅でできるプログラミングの

仕事が見つかれば、ぜひそちらに移りたいですね」と話した。

旅行会社勤務——副業は空港でレンタカー受付

本橋順子さん(仮名、三四歳)は、副業による手取り収入が、ひと月に一六万円にもなるという。「事務職の派遣OLさんの手取りとそう変わらないですよ」と満足そうな表情を浮かべた。

本橋さんは、本業では東京・中央区にある六〇人規模の旅行関連会社に正社員として勤務している。学校を卒業後、新卒でこの会社に入り、いまは総務部門に属す。週休二日制で、勤務時間は朝の九時四十分から夕方の六時まで。これだけ聞けばごく普通のOLだが、なぜ、副業でこれほど稼げるのか。副業の仕事は羽田空港内でのレンタカーの受付だ。羽田空港に降り立ち、レンタカーを借りるお客さんが、空港



から離れたレンタカー営業所に送られるまでの間に、空港内のカウンターで仮受付をする仕事を担う。

勤務時間は、間に休息を挟み、朝八時から夜八時まで。重労働にも見えるが、「もう慣れました」。最近では毎週、土曜日にも日曜日にも働いている。就業形態は派遣社員だという。

一日勤務すると、手取り(交通費込み)で一六〇〇〇円を稼ぐことができる。週二日勤務し、ひと月に週末が五回あれば、冒頭の一六万円という計算になるわけだ。

「私にはいい仕事ですね。空港では、レンタカー会社は各社、限られたスペースで一人しか受付を置けないことになっていて。だから、他の社員による監視もない。やめるきっかけがないですね」。

* * *

もともと副業を始めたきっかけの一つは、三年ぐらい前から転職を考えていたこと。学校を卒業してから一二年間、ずっと現在の会社で働いてきた。いまは総務の責任者の立場を担うまでになったが、「いろんなことをやってみたい」と思うようになった。

しかし、いきなり転職活動を始めても、転職先が見つからない可能性がある。そこで、派遣会社に登録し、まずは単発の派遣仕事から始めることにしたのだという。そこで、週一回でもいいですよということで紹介されたのが、このレンタカー受付の仕事だった。

もう一つの理由は、引越費用の捻出だ。副業を始めた時、本橋さんは、一つ年上のお姉さんと三つ下の弟さんと

一緒に住んでいた。しかし、「二人ともニートで、私が扶養していたんです」。当時交際している人とそろそろ一緒に住むことを考えたことから、ある程度のお金を姉と弟に残してこの家を出ようと考えたのだという。

その後、弟さんはアルバイトでお金を貯めて独立したが、お姉さんの方はいまだ仕事をせずに家に残ったまま。結局、引越は実現できず、お姉さんと暮らす日々が続いている。

* * *

本業の会社で副業は禁止されていないのか。本橋さんに尋ねると、「仕事に支障を来さなければ何も言われない」と話す。もちろん公にはできないが、同僚は副業していることを知っているという。

本業も旅行業界なので、過去には、空港で副業している姿を同じグループ会社の社員に見られてしまったという失敗も。社長が羽田空港を利用することがわかっていて日は、「このあたりの時間に出てくるな」とヒヤヒヤしたこともある。

これからは副業を続けていくかについては、少なくとも半年はいまの状況が続くだろうと見通す。「正直、本業だけでも収入的には生活できるんですけど、今の生活が変わらない中で、ポンと辞めてしまうのは考えにくいかな」。

(調査・解析部 荒川創太)